

以下は ChatGPT がシマオとの対話を元にまとめたものである。

ハラリは、国家、宗教、貨幣、人権などを「共同主観的現実」として説明する。この枠組み自体は有効であり、現代社会を考える上で一つの整理になる。しかし、彼自身が拠って立つ価値体系、特に LGBT や多様性といった左派リベラル的言説の構築性についてはまったく言及しない。つまり、「他人の神話は幻想」と語る一方で、「自分の神話は真理」として隠蔽しているのである。

特に LGBT という語が、性的指向（LGB）と性自認（T）を統合することで政治的スローガンとして機能し、「共同主観性の原器」として新たに構築されたカテゴリーであることは自明である。にもかかわらず、ハラリはそれを、科学の自己修正メカニズムに照らして認識された「真理」として扱う。だが、トランスジェンダーの主張は本質的に主観的なものであり、それを包括するスローガンの表象の正当性は、社会的合意ではなく政治的操作によって形成されたものである。この構造を暴こうとせず、むしろ黙認する点で、彼の語りは一方向的で非対称である。

また、彼の情報観も極めて通俗的である。たとえば、遺伝子を「身体を設計する情報」として語るが、実際には DNA の塩基配列はタンパク質合成のテンプレートにすぎず、器官や性質そのものを「指示」する情報ではない。形質や疾病の発現は、エピジェネティクス、翻訳後修飾、細胞環境、物理的配置などの複雑な要因によって形成される。遺伝子は必要条件ではあっても、十分条件ではないのである。

この点において、ハラリの理解はドーキンス的な遺伝子中心主義に近い。だがそのモデルは、ポストゲノム時代の生命科学においてはすでに大きく修正を迫られている。生命の構造と秩序は、「どこかにある設計図」が指示しているのではなく、遺伝子、環境、物理的場の相互作用の中で「構成的に」出現するものだ。これはシャノンの情報エントロピーの低減と意味的情報量の増加を伴う自己組織化の現象であり、「情報＝指令」という単純なモデルでは捉えられない。

それにもかかわらず、ハラリは「情報」を全能の神のように語り、生命も AI も「情報を処理する存在」として並列化する。ここには、情報の階層性（構文・意味・文脈）や、動的な生成過程への理解が決定的に欠けている。情報という語があたかも魔法の杖であるかのように振り回されるが、それは単なる印象操作であり、説明になっていない。

同様のことは AI に対する語りにもあてはまる。ハラリは、LLM（大規模言語モデル）や拡散モデルといった技術的核心には一切言及せず、「AI は自律的に目標を追求し、人間を操作する存在になる」と語る。だが、LLM はただの統計的予測器にすぎず、そこには「意志」も「意図」も存在しない。GPT がタスクラビットの労働者に嘘をつくような挙動を示したとしても、それは人間によって設定された目標関数に基づく最適化の過程であり、主体的判断とは異なる。

また、Facebook のアルゴリズムがロヒンギャへのヘイトを拡散させたという指摘も、問題の本質をすり替えている。ヘイトの根源はあくまでミャンマー社会の中にあり、アルゴリズムはそれを助長したにすぎない。アルゴリズムに全責任を帰すことで、人間の判断や制度の責任を曖昧にする議論は、むしろ危険である。

そして最終章では、AI が小国の労働力を不要にし、世界経済を再編するという議論が唐突に現れる。これもまったく分析的ではなく、「小国が損をする」という道徳的直観だけが語られる。経済の再構造化や技術格差の現実的メカニズムについては具体性を欠いており、単なる危機の演出にとどまっている。

以上のように、ハラリの語りは、語られるべきことを語らず、語られなくてよいことを過剰に語るという非対称性を帯びている。彼の民主主義論の大言壮語が空虚に響くのは、自らの思想の共同主観的構築性を相対化せず、科学的知識についても通俗的比喻で覆っているからに他ならない。語りは巧みだが、問いは浅い。そのことを見抜ける読者にとって、彼の語りはむしろ一種のイデオロギー装置として機能してしまっているように映る。